



ムーチヨ熱ちい！ 『夏』は *Latin* よ！

OB会長就任のご挨拶

高梨 伸彰 (S52年入学)

ども。台風一過、さわやかに晴れ上がった今日この頃、と聞くと、子供の頃台風は家族全員で来るんだと思ってた私ですが、皆様はいかがお過ごしでしょうか？ 本号でも簡単に報告があるとおり、長らくロスガラの広い世代を結びつけてきた、工大近くの居酒屋「絲(いと)」が閉店となりました。私も結構長い間お世話になり、行けば必ず誰かロスガラの人がいる、と安心して一人でふらっと寄っていたものです。広い代のOBの皆さんとコミュニケーションが取れ、安心してOB会長の職をお引き受けすることができたのも、縁でいろいろな世代の人と気楽に話していたおかげといっても過言ではありません。

なくなったといえば、われわれラテン・ジャズな音楽関係者(テナラ族と言う!?)が大きく影響を受け、彼の曲の演奏もしてきたTito Puenteさんが亡くなりました。われわれの心に、演奏に、Titoの音楽はこれからもずっと残ることでしょう。本号では追悼の意も込めて、特にテナラな方々にメッセージをいただきました。

さて、恒例の山野ビッグバンドコンテストがやってきます。今年は8月12日と13日。ロスガラ現役の出演は13日13番目です。昼飯食って、午後一番に行けば、午後の眠気も吹っ飛ばす熱い演奏が聞けることでしょう。絲なき今、現役を見て聞いて、そして、一人で行っても必ず結構広い代のOBがいる、そんなもうひとつの良い機会でもあります。ふらっと行けば、入り口の下で現役諸君が割引チケット持っています。(ダフ屋じゃありません、ご安心を(^o^))。しばらくロスガラから遠ざかっている方も、気軽にお越しください。この機会を逃した方は、ロスガラメーリングリスト(logs@ml.cup.com)にて、ステージの様子と、その後の反省会&評論会の様子に触れることができることでしょう。

まだ入ってなくて、ご希望の方は bono-pet@jb3.so-net.ne.jp ヘメールをどうぞ。

恒例といえば、昨年12月のOB総会の場で新幹事が選出され、承認されました。本OB会の幹事は2年任期にて半数が毎年改選されております。以下に紹介いたします。新任の方、よろしく。任期満了の方、お疲れ様でした。

新幹事挨拶

新島 哲也(H03年入学)

このたび新しくOB会の幹事を仰せつかりましたになりました新島と申します。1991年入学、現役時代はBtbを演奏していました。パンマスもやっていたかもしれませんが、定演でのメンバー紹介以外の活動の記憶がありません。現在埼玉県与野市在住。埼玉県民の宿命でいつもは'北'関東在住と言われていますが、'北'関東在住'と言うことで幹事になったのでしょうか？いつかはまわってくるのではと危惧していたのですが、やっぱりきてしまいました。2年間という任期ですがOB会の更なる発展のため努力してまいります。皆様の御指導、御鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

宇野 マリリン 俊之(H01年入学)

OB幹事を仰せつかりました宇野でございます。思い起こせば11年3ヶ月前にロスガラの門を叩いたその日からOB各位と触れ合い(阿部さんにライブに連れていってもら、翌朝、田中さんに味噌汁をつくってもらったな~)、気が付けば「肉体派の仮装」の虜(とりこ)として育成されたのでした。振り替えば、休日は楽器を吹いて過ごし、毎年斑尾へ大挙をなしてでかけ、時にはB.B.Q、温泉に行ったりと、私のレクリエーションライフの多くの場面にロスガラOB(OG)が顔を連ねております。ということで、縁の深いロスガラのOB会幹事として、2年間馬車馬のように働きたいと存じますのでよろしくお願い致します。

会長の高梨さんを筆頭に、継続幹事の栗原さん、倉持さん、新幹事の新島さん、宇野が本年度幹事会オールスターキャストです。よろしくお願い致します。

特集 『Tito と私』 ~ Tito Puente を偲んで ~

<朝日新聞より>

『ティト・プエンテ氏(米・ジャズ・パーカッションist) 5月31日、ニューヨーク市内で死去。77歳。』

プエルトリコ系移民の子として、ヒスパニック系住民の多いニューヨークの「スパニッシュ・ハーレム」に生まれ育った。空き箱を棒でたたきながらリズム楽器の演奏を覚え、13歳でデビュー。その後、ジュリアード音楽院で学んだ。1948年、ティト・プエンテ・オーケストラを結成し、マンボ、チャチャチャが大流行した50年代に大活躍、「マンボ王」と呼ばれた。「オヤ・コモ・バ」などの作曲でも有名。米音楽界の最高峰であるグラミー賞を5回受賞。(ニューヨーク支局)



去る6月初旬、新聞報道の通り、ラテンパーカッションの巨匠 Tito Puente が亡くなったという悲報が世界中を駆け巡りました。私たちロスガラの者にとっても多大な影響を与えた最上級のラテンミュージックアーティストだったのではないのでしょうか。Tito の死を悼み、ロスガラを代表するパーカッションistの皆様にアンケートへの回答と『Tito と 私』と題して寄稿いただきました。

- (1) 一番好きなアルバム、曲は何ですか。
- (2) 歴代のLGのメンバーで最もTitoの影響を色濃く受けているのは誰だと思いますか。
- (3) Tito 亡き後のパーカッションistといえば
- (4) 自由作文: 『Tito と私』

高澤 峰之 さん (S54入学)

(1) そう質問されてパッと出てくるアルバム名は『The Mambo King』です。が、Tito が参加するアルバムで、このタイトルを持つのは少なくとも2種あります。ひとつは「100th LP」、つまり彼の記念すべき100枚目のアルバムとして知られるモノ。もうひとつは、映画『The Mambo Kings』(Antonio Banderasらの主演によるもの)のサウンドトラック盤です。「Hay que trabajar」などの有名曲が収められた前者も名盤ですが、私には、シネマとしてビジュアルなイメージで残り、また選曲も、

珠玉の名曲といえる曲々が贅沢にちりばめられた後者の印象が強烈です。映画のシーン中に Tito 自身も登場し、ティンパルのスティックさばきを見せつけてくれた「Ran kan kan」の演奏など私は一生忘れないでしょう。

(2) 歴代の、ということでは、私よりもっと上の代のVSOBの方々の中に、もっとダイレクトに影響を受けている方もいらっしゃるかもしれませんが、私が認識している時代範囲内では、田名部元成氏その人です。違うかな? >ご本人

(3) Tito 亡きとはいえ、「パーカッションist」として彼を凌駕する人材は他に(たとえばCUBAにも)たーくさんいると思います。彼には、パーカッションistとしてよりも、もっと大きな意味でのカリスマ音楽家(プロデューサー)としての偉大さを感じています。(カリスマって言葉はこういう人に使うのが正しいと思ったります。シブヤの販売員さんとかハラジュク美容師さんとかいます。すでに懐かし気味のT.K.さんとかじゃなく。)

(4) この作文でのテーマ的なことを、すでにアンケートの項目のところでもいくつか書いてしまいましたが、まず、プレイヤーとしてのTitoに対して、私が圧倒的にマイツてしまっているのは、あの、天衣無縫な笑顔でバチを上へ下へ右へ左へアッチ回りでコッチ回りで派手に(かつ面白く)振り回してソロをしてくれる彼独自のスタイルです。演奏していることを自分がいかに楽しんでいるか、を強力で表現し、かつ観客をその楽しさに確実に巻き込んでしまうあのステージアクトは、「音楽って楽しむモンだぜ」という思想を見事に体現してくれていたと思います。私自身、その思想に少しでも近づきたい、と今でも思いながらステージに立っています(もちろん、足先の爪ほども届いていないですが(;;))。そしてもうひとつ、確実に感じることは、音楽に関して生涯を通じて、それこそ“死ぬまで”エネルギーに活動し続け、100枚以上ものアルバムを発表するという偉業まで成し遂げた彼の音楽家魂、もしくはプロデューサーとしての体温の高さです。一生を賭して音楽を続けていくということ。事情は大分異なりますが、今年のヒット映画『Buena Vista Social Club』に登場した、老音楽家達の生き様に共感の涙を流したことに通じる感動を、Tito の訃報に重ね合わせてしまいました。なあって、まるで評論*のような*ことを書いてみたりしましたが、私の Tito に対する最終的なイメージは、結局のところ「やたらニコニコしたオバサン顔の爺さん」です。いまは普通のココロの居酒屋になった(らしい)新宿Cocolo coのこけら落としのステージで Celia Cruzと来日したときのウハウハえへらえへらとした佇まいを私はいまでも思い出します。“オバサン爺さん Tito Puente”よ、永遠に。

田名部 元成 さん (S63年入学)

(1) 100 枚目のアルバム "The Mambo King"が良かったですね。フルバン編成ですが 重厚でいてふわっと軽い、緻密に計算されたアレンジだと思います。

(Orquesta Del Juto でも演奏した Hay Que Trabajar が入っています。)Tito の曲では、El Rey Del Timbal やRan Kan Kan が好きです。激しいTimbalソロには体がしびれます。

(2) うーん。松岡と石井君。

(3) やっぱ巨匠、石井君でしょ(笑)。

(4) Tito Puente を初めて見たのは、1988 年の斑尾のジャズフェスでした。当時私はC年。ラテンをほとんど知らなかった私にとって Tito は衝撃的でした。それ以来、Tito のCDを集めるようになったのですが、60年代の Tito の録音を集めたベスト版は非常に気に入って何度も聞きました。その中の"A Noro Morales(ノロ・モラレスに捧ぐ)"という曲を聞いたときに「ラテンをやろう!」という決意をしたのを覚えています。松岡直也のコンサートを見に行ったとき、彼がラテン音楽の世界に入るきっかけの曲としてこの曲を紹介したときには、なんだか嬉しくて涙が出そうでした。この曲には"Maria Cervantes"という別名があります。作曲者は不明のようです。最近の録音では Tito Puente and His Latin Ensemble の "On Broadway"でも聞く事ができます。Tito Puente は 1925 年に N.Y. に生まれ 13 歳のときに Noro Morales 楽団でプロデビューしたとのことですが、私が Tito の演奏を聞き、その中の"A Noro Morales"という曲がきっかけでラテンの世界に入り込んだのは偶然ではない気がします。

松岡 慶 さん (H04年入学)

(1) 一番好きなアルバムは"Golden Latin Jazz All Stars Live in Village Gate"。現役2年の時に初めて聴きました。私が Tito の音楽に、あるいはラテン音楽にのめり込む大きなきっかけでした。このアルバムを聴かなかったら、音楽を続けていたかどうか怪しいと思います。一番好きな曲は"Ran Kan Kan"言わずと知れた名曲。名盤"El Rey"の録音が、私にとっては最も印象的です。

(2) ソリスト、石井順一郎氏。

(3) カルロス菅野氏。Tito の偉大さは、単なるパーカッショニストではなく、コンポーザー、アレンジャーとして身近なナンバーをラテンアレンジすることで、ラテン音楽を全世界に広めたことにあると思います。そういう意味で、彼亡き後の音楽界で Tito と同じ役割を担っている人物は?考えると、「熱帯 Jazz 楽団」を率いるカルロス菅野氏が浮かんできます。

(4) 私は毎朝、FM を目覚まし代わりに起床します。昨年の夏頃、まだ布団の中で朦朧としている私の耳に、「Latin 界の大御所、Tito Puente さんが…」という言葉が飛び込んできました。一瞬、びっくりして飛び起き

ましたが、「…ニューヨークのライブハウスで元気にライブを行いました」とのニュースで、ほっと胸をなでおろしたのを覚えています。Tito の活動の基盤は、時代とともに色々と変化しています。マンボ黄金時代の活躍は、言わずもがなですが、私がロスガウ現役の頃は、ジャズのスタンダードのラテンアレンジを中心とする "LatinJazz Ensemble" と、"Golden Latin Jazz All Stars" の2つのバンドで、頻繁に来日していました。私も来日の度、足を運びましたが、行く度に新鮮な何かがあり、彼は常に、時代と共に前身しているのだな、という印象でした。しかしここ1~2年は、往年の、マンボ黄金時代の名曲を中心に演奏するようになりました。先のニュースから暫く後、そのライブで収録された 118 枚目のアルバム、"Mambo Birdland" が出版されました。このアルバムでも、彼自身の「往年の」作曲が殆どです。いずれも、最近は全く取り上げていなかった曲です。私はこのアルバムを聴いて、何か、少し切ない気分になりました。Tito は昔を懐かしがっているのではないか? 往年のマンボ黄金時代を回想しながら、演奏しているのではないか? 彼は演奏しながら、走馬灯のように、遠い昔に、想いを馳せているのではないか? そして 2000 年 6 月 1 日。私は何時ものように、うつらうつらと FM に耳を傾けていました。「パーカッション奏者の Tito Puente 氏が、昨日…」今度は本当に嫌な予感がしました。そして、その予感的中してしまいました。その日は、彼の最後のアルバムになってしまった 118 枚目のアルバムを、何度も聴き返しました。何度も聴く内に、私は、私が生まれる遥か前の、マンボが最も華やかだった時代に自分が居るような、そんな錯覚に陥りました。彼は亡くなる前に、自分が最も華やかだった時代を、演奏という形で我々の前に再現しておきたいと、そう思ったのではないのでしょうか。そう考えると、彼の偉大さに、あらためて驚きます。慎んで、彼の御冥福をお祈りします。そして、彼の音楽が、今後も人々に愛され、一人でも多くの人に、ラテン音楽を知ってもらえるきっかけになれば、と願っています。

石井 順一郎 さん (平成08年入学)

(1) The 100th Album "MAMBO KING" やっぱり "Para Los Rumberos" ですかね。この曲をビデオで見たときの興奮はいまだに忘れられません。(注: CD には "Para Los ~" は入ってません。同名のビデオに収録されています)。

(2) 田名部 元就氏(笑)。Tito がコンガを叩いたらあんな感じなのでは?

(3) 国外: Ray Barretto。Tito 亡きあと、Percussion の巨人といえるのは彼だけではないでしょうか。国内: 大儀見 元氏。日本ではセンス・実力ともにダントツだと思います。もっとも注目されるべきプレーヤーだと思います。

(4) 「Tito とロスガラと私」・・・私の中ではロスガラと Tito は切っても切れない存在だったと思います。ロスガラでラテンをやるとき、その後ろには必ず彼のイメージがありました。Tito は私をロスガラに、そしてラテンの世界に引き込んでくれた大先輩です。そして Tito はロスガラの先輩である気がしてなりません(笑)。(私の場合、パーカッションの先輩というと、松岡さん、田名部さん、高澤さんときて、ティト・ブエンテなんです。) 彼はその愛嬌のあるパフォーマンスや性格だけではなく、音楽的技術という面でもまた、すばらしいモノをたくさん残してくれたと思います。ソロでのお約束フレーズ(笑)はもちろんですが、彼のピラ・カウベルワークフィルインは正確であると同時に人を踊らせ、ウキウキさせるものがあると思いませんか？ しかしもう、そのパフォーマンスも、ソロも、嬉しそうにカウベルを叩く姿も見ることはできなくなってしまったと思うと、本当に残念でなりません。きっと天国でもアノ顔でティンパルを叩いているのだと思います。心から、ご冥福をお祈りいたします。

小栗 彰 さん (S46年入学)

「ティト・ブエンテは逝っちゃったけど」
～ Special Editon ～

台風3号が上陸か、なんていうニュースに注目しながら書いてます。明日の成田出発便は既に欠航が決められたものがたくさんあり、国際便はまだそのなかには挙げられていませんが明日になったらどうなることやら... こんなに気にするのも、私のカミさんと娘がヨーロッパに明日成田から飛び立つ予定だからです。娘が高校の合唱部に入っていてオーストリアのリッツというところで開催される世界合唱オリンピックに参加するための旅行なものですから...

いきなりティトとは関係ない話題から入ってしまいましたが、表題にもありますように、「...けど」というのは私は彼のことは良く知らなくて、知らないことにはサッサとおさらばしてすぐに大好きだったサンタナの話振ってしまふわけです。今回の特集には全くそぐわないことは重々認識してはおりますが、折角パーカッション部門での話題提供になったわけですから自由にやらせてもらいます。

思い起こすのは4年前の大OB会。とても懐かしい大先輩、後輩たちと演った Mambo No.5、とっても楽しかったし、飛び入りで参加させてもらった東京ガラチョス若手OBバンドでの演奏も輪をくわえておもしろかった、いい思い出です。また、やる。どういふんでしょ、パーカッションって(音楽はみんなそうなんでしょうが、)ともかくやってる本人が楽しんでると、聴いてる人たちもみんなのってきてくれる、そーなんだと実感した、とてもいい再発見でした。(こずえちゃんも、ちゃんと来てくれたし。)

また話がラテンじゃない方に行っちゃうんだけど、今度

はオペラのことです。今日、日本屈指(らしいです、たまたま見たNHKの番組によれば)のソプラノ、佐藤しのぶさんのリサイタルに行ける機会があって(それもただで！なんでかという、息子がバイオリンを習っていて、先生からコンサート当日、舞台での花束贈呈役を仰せつかって私はただの付き添いでいっただけなんです。誰のコンサートかも知らずに...今となってはとても失礼なことばかしくて、最初はふだん縁のないオペラだし、すごい高い声出してふーん、でも退屈だと思ってました。ところが、それを支える管弦楽の人たち(N響のトッププレイヤー)の素晴らしいテクニックに魅せられるうちに、だんだん彼女の歌にもひかれてきて、しまいには感激して涙がにじんでいました。こんな経験、初めてです。超一流の技術に支えられた歌・演奏、それに演奏家のエモーション・研ぎ澄まされた感受性(すごいんだ彼女、しまいには聴衆の感激ぶりを感じとって、「豊田に)来てよかった」と涙ぐんで語ってくれました。蛇足ですが、あとで握手してくれた一流のオペラ歌手の手はマシュマロのように柔らかかった。) ...なんて言ったらいいのか、聴いているうちに次第に吸い込まれていってしまい、演奏家と聞き手とが一体となってコンサートホール全体がものすごい濃密なかたまりになっていく...

(ここで、ようやくサンタナ登場です。)思い出したけど、この感じ、30年近く前に来日するたびに出かけた、あるときは彼女と武道館、ある時はあの大佐古氏と横浜市立体育館でのサンタナライブで熱狂した、あの感じと全くおんなじ。ブラックマジックウーマンのサンタナのギターがすすり泣きを始めると、もうその後につづく怒涛のパーカッションソロを期待してみんなひとかたまり。そこへ、アーモンドペラッザの超パワフルな、コンガのとてつもない、なんと形容したらいいのか、ととても別世界の響き(流れている血が全く違うんだとガックリしたものです。) ...それがえんえんと続いて...途中で差し込まれるのが、あの「哀愁のヨーロッパ」。静かに、だけど切なさを感じさせ、それがかえってだんだんクライマックスへの予感を感じさせる。そして、ぐるぐるぐるぐる、そんな表現がびつたりのパーカッションとギターとベースとドラムとティンパレスと聴衆の歓声と、みんなないまぜになって、クライマックスへなだれ込んでいく...終わった後はもうほんと、全身の力を吸い取られてしまい脱力感が残らない、官能的な(言い尽くされた表現だけ)ライブだったよなあ。そのサンタナがまた復活している。山の手線の駅のホームでライブのポスターを見た。でも名古屋には来てくれない。「行きたいな。でも...」「行ったらいいじゃない、あやしげな飲みやにつぎこむお金があったら...」これが現実なんだよね...

(編者の一人言 : 小栗さんっもやっぱりラテンの血が流れているのね。)

現役活動紹介

現役バンマス 高松 孝拓 さん(H10年入学)

今年度の7月現在までの活動報告をさせていただきます。4月は新入生勧誘活動として、講堂傍にて野外ライブを行いました。天候にも恵まれ、多くの一年生に見てもらうことが出来ました。なかでもパーカッションとサックスの人気が高かったようです。その後もサックスは入部者が多く、未だに楽器の数が足りない状況。嬉しいやら、困ったやら。新入部員の中には、南米での生活経験のある人や、やたらお酒を飲ませる女性陣などがいて、頼もしい限りです。その後は、春合宿、武蔵工大、芝浦工大とのジョイント「L.S.B.C コンサート」、東大五月祭、日大とのジョイント「Dos Vientos」、五大+1、と、イベントやライブをこなして参りました。

春合宿では、練習するホールが24時間使える事もあって、異常に張り切ったC年達が深夜に練習をしてました。また、MMSも近くで合宿をしていたという事もあって、ロスガラ最終日にはMMSの方が遊びに来てくださって、セッションをしていました。それを見ていたC年達は上手さにショックを受けたようです。

四工大では、ピックアップバンドでコンマスをされた芝浦の方にお世話になり、その縁もあって、その後もロスガラの練習を見に来て頂いたりしております。その四工大の翌日の東大五月祭では、あいかわらず暑い講義室にラテン曲を持ち込み、さらに温度を5ほどあげました。「Dos Vientos」では日大の上手さに打ちのめされ、リベンジをかけた打ち上げでも打ちのめされる者がいたり、とても楽しいライブでした。個人的には、忘れられないライブ(飲み?)となりました。そして、五大+1では、上野の野外ステージにもかかわらず、あいにくの雨となってしまいましたが、かろうじて付いていた屋根のおかげでなんとか決行する事ができました。ロスガラのステージでは、マンボを2曲メドレーにしたという作戦が功を奏し、またOB、OGの方々の盛り上げにも助けられ、なかなか良い出だしでした。しかし、その後にちょっとしたハプニングがあったのですが…と、今後面白い何が起こるのか分からない本年度ロスガラチェロスですが、是非ともOB、OGの方々には演奏や練習を見に来て頂きたいです。そして色々とおアドバイス頂ければ、現役のメンバーも喜ぶますので、是非、山野二日目(8/13(日))、13番のロスガラのステージを見に来てやってください。何が起こるかは楽しみです。それでは。



OB バンド活動紹介

トロンボーンおたく集団

「トロンボーン・ラポール」の全貌

ホイ 功郎 さん(S60年入学?)

はじめまして、私は川崎市鶴見の中華料理店「三越園」(仮名)で働いているホイ功郎(仮名)であるあるよ。今日は当店で毎月呑みに来るバンドのおじさん達についてお話するあるよ。

彼等は「トロンボーン・ラポール」というトロンボーンジャズアンサンブルのアマチュアバンド所属のサラリーマンだそうで、鶴見のスタジオでの練習後、当店で反省会を行なうのを人生の生き甲斐にしている様子。1987年(奇しくも、ベンジョソソが9秒83の世界記録を達成した年)に東京近郊の社会人ビッグバンド所属の凄腕Tb奏者達が意気投合して4Tbのバンドを組んだのが始まりで、何回かのメンバー更新作業を経て現在のメンバー編成(6tb+p,g,b,ds)になったとのこと。LG関係者は、創設時からのメンバー高梨('77入学 tb:今年6月をもって退団)、'90年から参加の柴('82 ds)と鈴木('85 b)、'97年から参加の杉浦('88 g)の4名。

13年の歴史あるバンドだけあって、レパートリーはグレンミラーからモダンジャズまで約100曲。TBSラジオ「オレ達サラリーマンバンド天国('89)」と「浅草アマチュア音楽祭JAZZコンテスト('92)」にて敢闘賞受賞経験ありの実力派(当社比)。活動は月1回の練習以外に、川崎を中心として、北は函館から南は伊東温泉、東は茨城県牛久から西は富士吉田と日本を股にかけた活動を展開、また、結婚式やダンパは勿論、川崎港祭り、中学校の音楽観賞会、養護学校の納涼祭、レンタルビデオ屋の开店セレモニー等の幅広い活動を精力的に行なっている。気が向くと、東京・神奈川のライブスポットでライブを行なうらしい。

「ラポール(rapport)」は仏語で「親密な関係」という意味で、Tb の技を磨くと同時に人間関係の練鍛も狙いとしていて、当店で頻繁に行なわれる練習後の反省会も熱心で、最適マウスピース選択におけるベストソリューション議論から女にモテるスライド振動係数の算出方法に至るまで Tb 奏者同士ならではのディープな話題でいつも盛り上がっている。

プロとの交流も多く、原田靖、鍵和田道男、早川隆章、川崎義明、村上準一郎(以上 tb)、田辺信男(ts)、山本勇(ds)、麻生光希(vo)、新澤健一郎(p)をはじめ多くのプレーヤーとの共演経験があるとのこと。

ビッグバンドの中で目立たないとか、ドラえもんでも吹ける楽器だとか、トローンとしてポーンとしてるとかからかわれたり、また、先日発表された日経新聞の大学生に対するアンケート「就職したい楽器」の結果を見ても、Tb に対する世間の認識はまだまだですが、是非このバンドの演奏を聞いて Tb サウンドの素晴らしさを知っていただければ天にも昇る想いですとリーダーの平賀氏も言ってます。バンドの活動予定については、彼らの公式サイトに随時掲載してるのでそちらを参考してみてください。

<http://www.eva.hi-ho.ne.jp/sakagawa/>

それでは、夜の鶴見でお会いしましょう！



(注意) 写真は本文とあんまり関係ありません

無くなった第2の部室

～大岡山ドキュメンタリー～

2000年3月31日、大岡山駅南口地下飲食街のお店「絲(いと)」が閉店しました。フコロは寒いが時間はあって(夜更かしが平気)、酒と家庭料理に飢えた学生達にとって本当に嬉しいお店で、ロスガラにおいても、代々多くのメンバーが客としてバイトとしてお世話になりました。どんな飲み会でも最後に行きつく所はこの店と決まっており、へべれけになって騒ぎ立てる私達を店のママさんは暖かく迎え入れてくれました。皆が集まるお店として現役同士は勿論、現役とOBの絆を深めることにも重要な役割を果たしてくれたのです。「絲」の閉店で、また一つロスガラの時代が変わります。



シリーズ

ロスガラの妻たち

鳥井 謙治 さん(S60年入学)の妻、
チーちゃんの場合

”ロスガラの妻”になって1年8ヶ月になります。音楽好きの私にとって、結婚してからの生活は、彼の影響も受けて、ますます音楽と切り離せないものとなりました。そもそも私たちの出会いは6年前、私の通うSAX教室に彼が入ってきたことに始まります。SAX教室の中では、経験のある彼は演奏が上手で、しかも明るい性格で目立つ存在でした。しかもロスガラで鍛えられたためか(?)お酒に強く、同じくお酒好きな私とは飲み会で何度も顔を合わせ、仲良くなっていきました。彼に連れられ東工大の学園祭やロスガラの定期演奏会に行き、ロスガラについて知り、演奏を聴いて、BIG BANDの迫力、ラテンリズムの楽しさを感じていくうちに、すっかり私もロスガラファンになりました。それまでフュージョン大好き人間だった私も、ラテン、BIG BAND JAZZのCDが増え、それらを聴かない日はないぐらい、毎日の生活に彩りを添えてくれるものとなりました。彼のことを話すと、ロスガラがすぐ結びついてしま

い、彼の明るさ、人柄もロスガラで培われたものではないかと私は思います。素晴らしい仲間達と過ごした思い出が多く、その仲間達と今でも変わらないお付き合いをしている彼をうらやましいな...と思います。そして私もその仲間に加わることが出来て、とても光栄です。これからもよろしく願います。



シリーズ内特別企画

嗚呼！ ロスガラの夫たち

『ロスガラ女性比率の上昇と共に、いわゆる「ロスガラの夫」が増加傾向にあり、彼らの活動が経済に及ぼす影響は無視できない』とのコメントが経済企画庁から発表されました。世界のハイテク産業を、強いては世界経済を支えるロスガラ OB の皆様に、彼らの活動について情報をご提供したいと存じます。今回、編集部では彼らの共通の趣味である「川柳」を独自ルートで入手しました。彼らの行動様式はどのようなものなのでしょうか。

< タマエさんの夫、大氏の場合 >

「退屈な 夫を置いて 妻バンド」
「午前様 タクシー妻を お出迎え」

< マキさんの夫、哲也氏の場合 >

「案の定 名目だけの 世帯主」
「結婚後 未だに呼ぶのは 旧姓で」

彼らの生態は悲しいほど、「良夫賢父」のようです。

OB 会からのお知らせ

1. 1999年度 OB 総会報告

去る1999年12月18日が例によって例の場所(銀座ライオン)で開催されました。OB 総会での決議事項についてご報告致します(とは言え重い内容ではありませんのでご安心を！)。

- (1) OB会幹事の活動(OB会報発行、名簿管理、総会運営等)に対し、活動補助金(慰労金)として、3万円/年を援助することを提案し、可決されました。
- (2) 1999年仮装大賞決定
毎年恒例、現役定期演奏会3部での仮装の大賞の選出結果は下記の通りでありました。欽ちゃんもビックリの斬新なアイデアと彼らのエンターテインメントシップに OB 会からささやか副賞(商品)を進呈しました。

グランプリ : 工藤秀利[D, b]

演目「海の上のベーシスト」

準グランプリ : 高橋史憲[E, as] 演目「浦島太郎」

準グランプリ : 浅田牧翁[D, bs] 演目「花」

高澤賞 : 桜木優多[Perc.] 演目「大仏」

高梨賞 : 三室かなえ[Gtr.] 演目「3point
シュート」

商品 - グランプリ : CD 券 1 万円

準グランプリ : CD 券 5 千円

高澤賞 : ギロ

高梨賞 : クリスマス用お菓子入り
長靴セット

編集後記

学生時代、無い袖をふるって、はじめて高級料亭「Blue Note」に行った時の板前さんが Tito Punte さんでした。彼のサビの効いた料理に感動したものでした。もう、あの料理が食べれないと思うと寂しいかぎりです。

しかし、本文であるように、Tito さんに傾倒した優秀な若手料理人が、なんとロスガラ OB の中に育ちつつあるではありませんか。彼らが世界の美食家の舌をうならせる日が来るのが待ちどろしい今日この頃であります。

>> 田名部様、石井様よろしくね。